

宇宙人レモネード

鶴間小学校 五年 井上 いのうえ 卓鴻 たくと

「ん？あの青いきれいな星はなんだ？」

「よし、次の惑星はここにするか。」

数々の惑星を侵略してきた宇宙人が次にえらんだ星が地球だったのです。

「金ピカの建物があるな。きっとあそこがこの惑星の中心にちがいない。」

ズズーン、ドスンッ。

地球におりたった宇宙人の一団は、京都の山奥から行動を始めました。

「よし、お前たち！この星の調査をし、我々のものとするのだ。」

「ん？何かいい匂いがするぞ。」

「あの子どもが持っている黄色い液体からだ。」

「よし、とびこめ！」

ジャボーン

「美味しい、美味すぎる。」

「あっちにはオレンジの液体やシュワシュワしているやつもあるぞ。」

シュワワ、ドボーン、ゴクゴク。

「僕のレモネードがない！」

あっちこっちでお客がとまどっています。

そしたらお客の中の一人がうっかりコップに入っていた宇宙人を、ストローで飲んでしまいました。

「も、もちもちしていて美味い・・・」

美味しいと気づいてしまった人々は、そのまま宇宙人をレモネードに閉じ込

め、「もちもちレモネード」という名物として飲まれて全めつしてしまいました。

「まさかこんなところで・・・無念・・・」

これは京都で一瞬はやった、不思議な飲み物の話。こうしてひそかに地球は守られたとき。

(515文字)

審 査 員 講 評

昔話「3枚のお札」の鬼婆をはじめ、妖怪や宇宙人などの人ではない存在が人に食べられてしまうというお話は昔から多くありますが、今作は題材のレモネードや、「もちもち」という食感などに現代的なものを感じました。ちりばめられた擬音語も、物語全体を加速させていて、いいですね。「京都」という言葉より先に「金ピカの建物」という言葉を出された点にもセンスを感じました。

―― 田丸 雅智